



源流臨江抄一



石の字の跡 才一

月録

桐壺

白くくく



は物種よ中の差異あり定家以て自筆表紙中以勅授此

處うる事一事を河内守光の源氏物語ととりまじり

てあらまれしまく河内中とせむ小のひなもせま耕

花山院河内中成信一て心けりこふて成家をいれし

中と用給 豊的水源を抄し清合親王河内抄河内述作と

つり花鳥餘情又なり一室宗祇定家以て河内抄河内述作と

りく思ふ事志多良なるのとつひ一人小あひや

ゆれ書表紙傳授して此ら不審と一系種同河内へま

めく三条西敷内府 道遠院へ講釈やとさびくとひんとも禁中

のうきさすハ道遠院改へ為やとされ事とあり構

必院殿太府 道遠院河内二男 道遠院及小あひく清合親王

引い出んと也。亦道をた今引いて其のるを邪道と
入るふ習うては不可更と云々。莊子の心同之仁義あり
小乘より大乘より引くも心也云云。經仁王經云々。如
みてを應るに人事あり也。くくくくくくくくくくくく
勸善徴惡 敬 コロストヨムなまコラス心也

い柳種よ好又のこわくとみりゆへ小悪の事也。好
て世経る一哉と思ひて名を抄ゆとけし
時代寛弘初造世之康和後有は五系二系系抄黄門之賞
歌云く後寛弘文の十年に造四百八十余年也
後文明永禄六年造九十又年也以上又百八十余年也
可成丸

題号 全篇以之源氏云々。其の源氏ト云々。姓始千陽流
源字考 監觴小水為九河之源之義。祝而用也
い柳種亦含其理。仍累世。握既不誤也。又水源多に受一統
源字考 監觴小水為九河之源之義。祝而用也
い柳種亦含其理。仍累世。握既不誤也。又水源多に受一統

源字考 監觴小水為九河之源之義。祝而用也
い柳種亦含其理。仍累世。握既不誤也。又水源多に受一統
源字考 監觴小水為九河之源之義。祝而用也
い柳種亦含其理。仍累世。握既不誤也。又水源多に受一統

仁明の子源氏 大正三
源氏 准 醍醐 朱雀村上 三代准 源氏
源氏 准 醍醐 朱雀村上 三代准 源氏
源氏 准 醍醐 朱雀村上 三代准 源氏

久新お似平

周公且自居易漢ノ事
仔細公ト云ハ本朝者原氏

古本紛姦

古人者不可說之也唯院涉記未見荒島之我國王寶源氏
物語子にたれをたうる也一云云定家以宋魏魏の記之
六百番判俊成の源氏又所む言ふんハ下此書也云々
人毎書好々乃と云ゆりいささうのウ風書りりて
心流成りれりといともなる心と能く付て可也
唯院涉記兼久一切物語涉多或事一或係事ノ仔細物
強詞搦事おそれとむ上ふめ死身殊勝也大和を下劣
進り手外實何物語書不建無も檢之故也源氏物語不可說
物也又此俗人之所為言或ア忠之始て一糸院涉法更不可

説物也亦説を日中記と云うるもさるるれと此物下町
古本門内紛姦比備云日中記高々云々

元多所説不可説やと種の外と云心丸

桐壺

凡卷の多し河上准末古田諦流門一もの詞と云り二もの言
をとりて二もの詞と云との二と云り田上と云ふも詞にも
さるるり必とせり一ゆゑ門二もの室門三ゆゑ亦も亦
室門四ゆゑ非も此也門一切云経をけ田諦出ズ 是りり
しり加田諦外別立に性とも釈せりよ其の道理を言おれ
かろりあふへ文とのびり
或説云一説之他意は天台田諦流門云々

卷名 相壺又夜の也

又念^ツ也 淋^シ景^{ケイ}舎^ヤ 相^ツ壺^ノ内^ニ三^ニ殖^殖

源氏末^{タテマ}延^ヒけ^ケら^ラる^ル二十^ニ歳^ノの^ノ事^ノあり^キ卷^ノ末^ニ乃^チ詞^ヲよ^リれ^ト

か^レん^成行^テて^後と^{あり}く^まの^事十^六支^也卷^ノ末^ニ終^ル也

あ^のた^らふ^ひ多^キる^事

つ^れれ^の夜^ノ時^ノあり

け^レん^端に^解甚^深なり^てあ^らま^りれ^ば理^を念^める^事也^若と

不^ス死^スして^支持^スら^る事^と也^五つ^つ指^より^せゆ^りされ^る

卷^ノの^終に^詞あり^しを^念み^しら^る也^若不^死を^侍人の^類と

き^まは^られ^る也^若世^にア^の比^に女^等あり^し也^若人^の類^{あり}

き^まは^られ^る也^若書^の類^{あり}し^もか^らん^だら^ばい^ふべ^きなり

る^べし

伊^勢集^の初^訂回^之を^念す^る也^又い^はれ^し一^乃は^終に^似

説^也 呼

伊^波油^子同^意也^中の^事あり^し也^其時^何と^いふ^も

也^若と^云ふ^三里^に事^{あり}し^もの^事も^いふ^也

女^沙又^夜 以^上至^二位^三位^也更^衣ハ^女官^ノ名^也 呼

女^沙日^中乳 女^沙に^中也^河河^二委

雄^略天^皇七^年求^雅媛^を備^上送^女を^女沙^の初^也

漢^朝八^十一^女沙^{あり}周^礼曰^く漢^朝の^事あり^し也^周礼^曰女^沙叙^れ

王^燕寝^の威^時獻^切又^文王^志妃^百二十^人あり^し也^一人^夫人^三

人^嬪九^人世^婦女^七人^女沙^八十^一人^之夫^人論^婦乳^三

鄭玄注曰夫人如之台是宮婦也九嬪掌教曰德

九嬪北九嬪九嬪掌婦學之法以教九嬪也曰法謂婦法婦

宮婦云婦功也

女七世婦 主初喪祭賓客婦服也唯其終服之人

後漢名曰以備肉織為后正位文園曰新天皇八十一女所

序下王之樂寢 法謂進法於王也此八十一之士

皇代記曰 桓武天皇女涉後三位攝三井子 後四後下

女教 采花物於二ハ中ハ女守以乃ひまめや美と

ひくこと代をばゆる者の人乃を不事となり

仁明天皇代佛代より初る河海二妻便教女教者云々

女教なるもの包らばく不也故号女教

時女官とあり如何 此女官也

女教強也 自強の時 祭内より代女所を事受女所

代とまで今はあの上臈といつり

やんことさま 上臈をさるすくく強やも強もぬぬ也

を儀事とあり

時先く時一字とあり ぬやうを字也時よ感しる

とのひかりをいむめく同茶

ひめより 女教女所之中ハ三所と書るの上臈のり

もんじりや大極なるゆ也あまを慶懸志くむるは

る一人内を相交りたりやく志しる人乃るりるを

めさぬしや 冷眼と云 女教をめおつりぬやうよ云れ

まや冷眼と待小他也

まいて 心あふ討也 亦く見也

振とあふ 振とれつもくるーまとがり あうれと

思ふぬ山の旅よたふおひらるゆと人れけき

あひなく 遠例つらなる心也 ぶりた心こそ可然

後漢書曰生男如狼於思を冠 生女如鼠恐其成

うんばちめう人かとも きの字まくか極むまをれ

心あもまり 心殿上人 侍臣ハ及上人也

あひなく 阿ちさるま也 魁もりた心をあり

目とそまあけ 史記曰人身 鄧都側目号卷

直仁はいて 史記不 録るむらううとて目とるを

めくまのと紙とれ討乃人みてらて如書まゆとまをき

あま物と云心成し 去る人ふひのひつて海をゆき

とがり

毛路のいほも 殷討姐已也 周幽王廢姬也

世乱れれるを

史記曰姐已カ云事ニシカカト云事ナシト云

廢姬燈火ヲ見テ嘆シナリ

祇云まを二版よかたり 揚考妃のためーもとの字也

起ラコリ 驕ラゴリ 不用

何れたなき 伊坂摘證の討みたるーよまことのもろ

くくあこれをう乃心也

又大納言 又家の又也 アゼツシ 按察使巡代納言也

りめあふそ 句を切てたふししは蒸まんを志て

こせう也 イニヤウヘキセン 法陽が異族をよ女をすお方と云

ものくく一気 キョウキ 急度志しつ回をさる

ふるところ キナリ せ形と書

玉のおれこ 玉のをとけくあふる寄あじり

みのさちる タニシヤ 源氏誕生也

いらのみこ 朱雀院御事也

お大旨 魚名の又あひよりぬゆへなり

ををれりく タニシヤ 寄まともなり 縁者の心也

まうあのみ 儲皇也 今度乃内門とやいひるあへし

りめり 便ぬよきて物夕突ニヤカハ

又家のう人官一あふへ又位中あぬをとりり

みり タニシヤ せとよむる

あふさりまきく句を切て又上まあつとれともあひ

みあふあ不タニシヤひむくますまは位儀く成てのろく

みしけろを源氏生あてれま成たるとる

ね月とのこり ハモツタニラハステルニラ 按考專叙書同筆 長徳叙

あつます 纏 不破日本紀

もうちもようせむハ 不善 不融不用

春之坊 志を陽方相とせ養を必也

人しりあき 魚治子入内ありて又朱雀院之御連枝もる

ゆへに縁を所門むけりし中をわたりぬすしは後を女子
此注釈也と可寛女所をりて世上人をかげしと也
ゆへに縁をりき 文心の中也

吹毛求疵 漢書文

ふとふふふのけり枝もまゆを毛を吹きさとりあり
ことなき

中しく 小面面白む也詞がなりなり

三のやねき 桐壺也後凉殿の浪打る波と隔まり私徴波
麗景波を羅波ふと紙にて相壺へもれ也後凉波より乃
道の事なるなり

又舎ト云ハ

梨子壺昭陽舎 桐壺 常ニハシケイサ 菖梅と雷鳴と

うらげりつ波 肉階波殿板を打ちしりて此揚やも可

むね馬道 志んの事此の海路乃廊下成る

あやしきわさ 村上所町を羅殿の女所と申之始る

方く乃人不清とらししげると云

まさるゝ 邪治 其治はむ也

とくらむるを 文夜はききてあなるお振がり

つたおめを くるしむ也 よりたふつしりあはれ

心く叶あり

あうらうてん 清涼殿よりけりて西の波也つ海の清所

お双の殿る心 三ラウヨミク世也 せいりヤウトヨトモ

あうらう 曹司俊成説くれを正字よりあはれり

やがうとあるる人ありていふ衣乃恨又遠也
これみこころに 皇太子三歳著袴例

冷泉院 天曆四年十月廿二日春之ノ時

園鞆院 元山院 一条院之ノ河よ妻

やうつりされさめとの 肉茂案 網改 ねと光とのも

後涼没りあり

なよまけ れとけりくるま

又六日 つみのびゆりこよびへし ぬき後人もあり 呼

海りてきせとあて未退出ひ物種り ぬびの事多し

治定退出とれやへ付て云也

こよいてく 河ふり多む今

こよいてくつこぬけりり水をぬき下ふのよひ

てきさゆ

たゆま 随窳タユレトヨム 史記 懈 玉篇可松元

口まの 我のまれりてきりれこの心也

てくるまれんし

短衣難成云 九葉鞆車ど入内裏若妃限曹日夫人及内

親王限温明教後凉没之故

令婦三位兵束陣但嬪女涉及縁王大后嫡妻系鞆限兵

束陣 花

仁明天皇女依病退之河以聽鞆卒逝之故被贈三位

上下略河

雨澄^{サツ}平^{ヘイ}門^{モン}途^ト半^ハ車^{クルマ}ゆりされ 是乃^{コノ}此^{コノ}門^{カド}今^{イマ}の^ノ小^コ此^{コノ}

海^{ウミ}門^{カド}也 輩^{タビ}の^ノ傳^{ツタ}女^メなど^ト禁^カ中^{チウ}一^{イツ}か^カと^トの^ノる^ル約^{ヤク}赤^{セキ}不^フ計^{ケイ}

小^コゆ^ユら^ラさ^サら^ラく^クと^ト可^カむ^ムは^ハ 傳^{ツタ}は^ハる^ル照^{テウ}也^ヤも^モゆ^ユら^ラあ^アる^ルと

也^ヤ輿^コ小^コ輪^{リン}と^トり^リて^テま^マま^マ引^{ヒキ}と^ト和^ワ秘^ヒり^リあ^アる^ル 嗚^ウ

み^ミま^マり^リと^トの^ノ方^{カタ} 又^{マタ}夜^ヤ時^{トキ}は^ハ條^{ジョウ}て^テの^ノ心^{ココロ}と^トその^{ソノ}ま^マく^クり

ら^ラめ^メと^トは^ハ表^{ヒラ}あ^アり^リ一^{イツ}つ^ツの^ノま^マま^マい^イき^キた^タさ^サなり^リ

つ^ツと^トの^ノ思^{オモ} け^ケ詞^ジむ^ムる^ル威^イを^ヲこ^コひ^ヒて^テ新^{シン}を^ヲれ^レみ^ミ一^{イツ}事^{コト}の

心^{ココロ}乃^ノか^カら^ラ成^ナれ^レる^ルなり^リひ^ヒ也 世^セ上^{ジョウ}を^ヲ皆^ミあ^アひ^ヒあ^アる^ルし

ら^ラみ^ミり^リ一^{イツ}む^ムへ^ヘ又^{マタ}夜^ヤれ^レ里^リま^マは^ハ流^{リウ}可^カ始^シあ^ア退^{タイ}せ^セゆ^ユり

流^{リウ}小^コ是^シも^モゆ^ユら^ラく^ク思^{オモ}は^ハる^ルよ^ヨり^リて^テ也 嗚^ウ

見^ミこ^コを^ヲ明^{メイ}けて^テも 飛^{トビ}を^ヲ委^ヰ け^ケ傳^{ツタ}あ^アり

親^{シン}王^{オウ}ヲ^ヲニコ^ニト^トヨ^ヨム 但^タぬ^ヌけ^ケえ^エん

か^カれ^レこ^コの^ノあ^アる^ルん 幼^{ヨウ}少^{ショウ}に^ニ所^{ショ}を^ヲあ^アは^ハす^ス也

よ^ヨら^ラく^ク大^{ダイ}く^ク此^{コノ}人^ノの^ノあ^アら^ラる^ル一^{イツ} 是^シは^ハ別^{ベツ}だ^ダと^ト可^カ

経^{キョウ}事^ジ小^コま^マら^ラく^クた^タふ^フと^トなり^リ

と^トた^タき 多^タ部^ブ野^ノと^ト也

む^ムな^ナ一^{イツ}あ^アら^ラく^ク ち^チを^ヲあ^アん^ンそ^ソう^ウと^トう^ウん^ンの^ノ詞^ジり^リ

る^ル方^{カタ}へ^ヘし^シ又^{マタ}さ^サ一^{イツ}つ^ツを^ヲ別^{ベツ}乃^ノむ^ムか^カし

つ^ツは^ハを^ヲ一^{イツ}向^{キョウ}せ^セもの^ノと^トあ^アら^ラん^ンと^ト思^{オモ}ひ^ヒ一^{イツ}車^{クルマ}り^リた^タつ

の^ノ人^{ヒト}ま^マま^マと^トる^ル

あ^アる^ル され^{サレ}は^ハ一^{イツ}と^ト人^{ヒト}と^トも^モ也

三^{サン}の^ノく^クの^ノ 三^{サン}位^イと^トあ^アま^マと^トも^モく^クの^ノく^クの^ノと^トも^モ

西に於てをねのまきりのくし柿中人のたよきり今
まぐ田位のお衣なりなり

せんまやう 乃ゆふめいと云必女細きよる人内記此

書ころとらめり聖廟セービョウおのりも清廟前シて女納ふよ

光るなり

り月一ききき 双地ほ也

ぬひーり けしうへ字也

まぬあり記 皇ふとらもけり天子のあま里以外は

所寤をあらとる

ひもせ 心揮えさりとよむ 平 日中記

まげおよ 吾人望 日中記

なしてそ ありけりありのせきひうありありなり
てうんひきうりてける

野分さうてりありむき おや たらてをめくと云むと

ひやうとと一説不用お也 將何をしと云むと云ら

と一詞の助也

ゆけり 鞆員 余婦を今内内乃外織物と云むぬと云ら

余婦と云中筋也 元一素 くとた心糸門なりなり

女官と云らキョウおと若す清門の余婦と云らむむをめりや

のじ也

なまけうけりまら びんま乃やみのうけりをけりこのお

ねるおいらぬのたけりなりなり

中身もやとめそとあれたを奪りれりてふと云ふ
は詞より又うれふととあそりめ也

口ひまのそ 奪車とゆくまをてかりり

わもめ 奪られとも 文夜よまれりてかりり

今日 懸寡孤獨字注ほ委又十以上とせし支調寡

意らるひらりて 奪程意らるひするらる

やへむくく やふ人もるま書けきとらる春と八重葎

おもさほきりたる 費之

八重葎志けける者れさひりきた人こそみし秘林をま

よりり 奪奪 二首と引合てまなり

内ゆれ 短歌原 先乃使也

思ひ志のまら 奪定初拭涙 杜子

めもみく 面白詞也 明詔と云

けくくも 勅也の詞也

ためらふ 跟跡

いし者なり 幼稚也 文夜れりてこころ源也とかりり

文夜れく 文禁りたりとふ

あ喚びすれを渡るゆへし こそはし文夜事也

余けつさ 莊子 余若多辱

松のねもらん いりふとありと云れしき砂の松

ねれもらんしとまほり

ゆゑき 何もほ可然也

ゆゝゝ 音セリフ子コ返ヘ討ツ也 忌イミ字ジ也 俗ソコわワれレもモあアり

ゆゝゝ 七シ夕セもモうウやヤまマれレわワらラ拍ハクくクそソあアらラひヒ

くクんン海ウミとトふ 修シユ撰セン奥ウ入ニ 人ヒトのノ親オヤ乃ハ心ココロをシ害ガハシめメあアらラねネやヤ

子コ成ナリ行ユクのノ道ミチうウ海ウミふフひヒめメらラうウれ

わワゝヰゝヱ 今イマ沙サ伎キ以モ故コ余ヨ婦フとト侍シとトりリ

うウをオまマうウ海ウミをシとトうウめメとト

すスゝヰくク 子コ迷メ也

思オモひヒをシのノちチ 顔カネ齡レイとト云クモ河カをシまマらラぬヌのノくクらラひヒをシ

顔カネ隱カクレ 不フ家ケ明メイ 名ナ玄ケン顔カネうウひヒくク叶エわワり

よヨこコさサ海ウミなりナリ 様サマ死シとト思オモとト也 業ノブ常トコ恒トコ一ヒト鏡キョウり

人ヒト乃ハ心ココロとトあアらラるル 西セ門カド乃ハ涉シひヒゆユのノ心ココロ事コト一ヒトとトりリ

もモとト也 厓ウエ主ノのノ心ココロはハ勝カチ也 後ノチ凍コウ殿テンのノ父チチ夜ヨとト曹ソウ目メと

用ヨウりリ後ノチ後ノチるルもモなナやヤまマらラるル也シ

うウゝヰゝヱもモ 頑カン カタクナシ

いたイらラ 夕セキ日ニチおオらラりリ次ジ弟テイとトりリ

ひヒれレおオ めメとトれレをシ性セイ也 叔シヨク考コウのノ字ジ無ム用ヨウ

すスゝヰゝヱ乃ハ乃ハ 余ヨ婦フ

飲インをシゆユるルとトいイふフ用ヨウ也 虫ムシよヨ力チカラをシはハくクとトうウめメとト

いイとトいイふフ 男オトコ女メナシはハ昇ノボ殿テンのノ人ヒトをシもモのノ上ウヘ人ヒトとトさサり

母ハハのノもモにニあアらラるル 父チチ夜ヨはハ委イ 母ハハ海ウミはハ委イ 又マタ日ヒ海ウミはハ

わワれレかカ 純ジュンとトいイふフとトいイふフをシあアまマらラるル 杖シヤウ乃ハはハひヒとト

弟テイとトも 謝シヤ字ジとトいイふフはハ泣ナク乃ハそソのノこコとトいイふフ

春をさす御時、^{カミ}まて御ちち度とよせり

清らうらうらとくさくさ一^{ヒクダリ}枝 毛のうらみなり

記念 括仙居

見たりあるの 女侍とあはれきりとおきとすへし

命婦へ乃引出袖 髪^{カミ}の具^グのむらさき

町つり月くくくえたるをさくら袖いりしおきとまう

たえられきとたり

わのまらんくく 足まういさやんらんともま

あうくく一^{セキダク}糸 糸うらくく

まうくく 子述 色色 女衣母乃心中也

つなきんさい け巻の一も也

ていれぬん 中文のくんせぬいて秋の葉の音を

らんしえ 天^ゴ曆^{セイ}湯製 秋風ふるひく葉の音と

も清り人をさうたとい

長服袂のゆき 揚貴妃首の也 色振舞いれり

お茶の父みりつせとある物ハ袖思ふ秋のけみく

けりこ一首を御門れぬまうしゆせぬ人れと伊勢の

葉ののせゆまは亭子院^{テイシイン}乃御製まう可まう也今一首ハ

玉をんれあくらもちうて録しゆと書ゆもみと思

ひりきまゆと伊勢のよめり也豊之のちのつたつん出

志ゆらま可も服袂れぬま亭子院の御時ゆせぬ人

れりましゆれとままと末代はゆらりつん事の

ゆらぎを治す御書法師 ミチノリ 信西 シニセイ 唐書唐曆揚妃外傳 タウシヨウ

かきとまを勅カキしてゆくことありて今代より

長根初之能く中一ゆれを平治の乱可事と

故白川院おゆ心をつちやさんため思ひかた

てゆるとそあれあくるま緑山のやうな信頼シノノリのゆ

まいためすくなるゆり也 光

まゝと 待身と物々乃あくるさめとまひるゆし

とそあういおとのひなり

あゝさう後 文夜れ母の身 ぬきかゝるやりの文の母

文夜れ事也

こゝろをいふと 文夜れありて書かぬの心可読れ

天子の御書ある物と云事不用

故大納言・合婚やうとをみしねとさもさうやつめ

されへ文 五文り一の位を文おけりせぬ事也

合お即く 文夜の母のり 或は初しこなり

る人乃 條シノノリ環道士 幻術ゲンジツとて貴妃りあふらんを

直りうんきりさのみかして指て去宗よさけくそを母

の芳りりてゆくに文夜不達フタツまゝ不足とるるなり

れとりりると也 河原小童

ありはるる一奇 蓬菜ホウサイへあむを幻とら

ふふりれ 葉の限あゆ物也

大波の 身ミ最意

亮のりのみちのきりも 表紙のなまを女良松子の
たし人を略して亮島のみちのきりあり討つとい
まきせきしとてまゝなりや

心も貴妃と美夢揃れたと人——をうり——くそあ
まきめ今又むの事とらふよを亮もよまきふつと
なりと也美夢揃れたと——をあとりなり——
めい——はさもらうそと一ま又又良の事とかり

こしとさ 玉隆也を美願作に翼鳥を魂死る連理枝

也恨欲

あろひとそ 礼記又其書有宴則不相 注相ハ 梓田

月もつとぬ け討は勝也 預ねあましくれ言とつひを

——つと四刻と可也

又夫到月既應白月海を女中快鐘 けり沖よお加と

書乃上も まらと討ふけくをてらるる

もき及上りへ海まくけくとりり

とりの火を 狐地挑壺未成眠

なとのけりさ 亥一刻方と兼兼り官人初夢河 けり

四刻 丑一刻に遊湯者申事 至卯一刻肉蟹を一刻奏

意簡な心限扱事也

ふゆのれとて 秋津敷信涼波 何春 東枕夜寝

あつとも——とそ 玉簫何くるもとて終しゆと

夏あもやとたのひのひきや

世の人 此より可

神代祖母 坊定なりとむるなり可

附私

年比りく世く乃終ひけるまき 祖母むと双比なり

文解光なり 所書娘よハ^{ゴキウ} 玄宗代 考徳成を貞

親政要とよと始終ふ也花鳥皇太子とのい^ハのの

恥とを皇太子へも不成^ラ明^リ 外記事也 紀傳^{キデン} 古^コ過

啓事との事也 明^リ乃^ノ時^トを^シ孔^ク安^ア國^クの^ノ注^ツと^シ後^ノと^シ也

らうたうー 芳^{キキラウトスハ} 良^{ニトアリイカ}の字^カ也

大^{キキラウトスハ}公^{ニトアリイカ}望^カ 犒^{キキラウ} 唐^{ニトアリイカ}より怒^カよ

する人より半^{ニトアリイカ}と^シ後^ノと^シ但^{ニトアリイカ}別^{ニトアリイカ}表^{ニトアリイカ}ふも^シ相^{ニトアリイカ}遠^{ニトアリイカ}也 上^{ニトアリイカ}臈^{ニトアリイカ}一^{ニトアリイカ}也

おとくまむ殿^{ニトアリイカ}一^{ニトアリイカ}むと^シあ^{ニトアリイカ}ま^{ニトアリイカ}を^シま^{ニトアリイカ}け^{ニトアリイカ}と^シく^{ニトアリイカ}こ^{ニトアリイカ}き^{ニトアリイカ}討^{ニトアリイカ}也

かみと 通^{ニトアリイカ}后^{ニトアリイカ}所^{ニトアリイカ}股^{ニトアリイカ}り^{ニトアリイカ}あ^{ニトアリイカ}人^{ニトアリイカ}ま^{ニトアリイカ}り^{ニトアリイカ}ま^{ニトアリイカ}り^{ニトアリイカ}り

かすめり^{ニトアリイカ}く 名^{ニトアリイカ}媚^{ニトアリイカ} 嬌^{コビタルトヨメリ}

うらとけぬ 心^{ニトアリイカ}の^{ニトアリイカ}り^{ニトアリイカ}と^シゆ^{ニトアリイカ}へ^{ニトアリイカ}なる^{ニトアリイカ}る^{ニトアリイカ}

人^{ニトアリイカ}代^{ニトアリイカ}ゆ^{ニトアリイカ}も^{ニトアリイカ}也 双^{ニトアリイカ}比^{ニトアリイカ}と^シる^{ニトアリイカ}る^{ニトアリイカ}

こまうと 高^{カウシイ}藤^{ニトアリイカ}人^{ニトアリイカ}也

まのうらみ 寛^{ニトアリイカ}平^{ニトアリイカ}遣^{チカイニ}戒^{ニトアリイカ}曰^{ニトアリイカ}尔^{ニトアリイカ}蕃^{ニトアリイカ}之^{ニトアリイカ}人^{ニトアリイカ}必^{ニトアリイカ}可^{ニトアリイカ}見^{シカ}也^{ニトアリイカ} 蕃^{ニトアリイカ}中^{ニトアリイカ}

見^{コト}之^{ニトアリイカ}不^{ニトアリイカ}可^{ニトアリイカ}逆^{ニトアリイカ}對^{ニトアリイカ} 必^{ニトアリイカ}字^{ニトアリイカ}心^{ニトアリイカ}而^{ニトアリイカ}白^{ニトアリイカ}め^{ニトアリイカ}され^{ニトアリイカ}て^{ニトアリイカ}不^{ニトアリイカ}計^{ニトアリイカ}也^{ニトアリイカ}

あうろくもん 穢^{ニトアリイカ}負^{ニトアリイカ}心^{ニトアリイカ}乃^{ニトアリイカ}玄^{ニトアリイカ}蕃^{ニトアリイカ}と^シ別^{ニトアリイカ}よ^{ニトアリイカ}る^{ニトアリイカ}所^{ニトアリイカ}ニ^{ニトアリイカ}ラ^{ニトアリイカ}ウ^{ニトアリイカ}ト^{ニトアリイカ}ヨ^{ニトアリイカ}リ

玄^{ニトアリイカ}傳^{ニトアリイカ}蕃^{ニトアリイカ}客^{ニトアリイカ}傳^{ニトアリイカ}危^{ニトアリイカ}と^シ玄^{ニトアリイカ}若^{ニトアリイカ}考^{ニトアリイカ}を^シ百^{ニトアリイカ}淋^{ニトアリイカ}と^シり^{ニトアリイカ}未^{ニトアリイカ}物^{ニトアリイカ}せ^{ニトアリイカ}り^{ニトアリイカ}申^{ニトアリイカ}人

蕃^{ニトアリイカ}客^{ニトアリイカ}と^シ同^{ニトアリイカ}し^{ニトアリイカ}察^{ニトアリイカ}よ^{ニトアリイカ}所^{ニトアリイカ}の^{ニトアリイカ}事^{ニトアリイカ}と^シまり^{ニトアリイカ}又^{ニトアリイカ}鴻^{ニトアリイカ}卵^{ニトアリイカ}を^シ腹^{ニトアリイカ}の^{ニトアリイカ}前^{ニトアリイカ}と^シ曰^{ニトアリイカ}解^{ニトアリイカ}

鴻乃鳴るとおまぬれは鴻乃を声とけとめるとまじ也
異國此人其物の可き也——と云りのありて其國の志
と傳ふ也 花

玄蕃おまの若とては師とつり七条末崔よあり
お六年 うらりの物経おもむけるあり

國乃れや 天子を國親と申す子 字訓 老條田海子
齋親民 帝王のおおとらまをともうたり其帝王は位
こそみまじうまふ事ありんまると又あめれ下を
補佐すくまきまきたるなり後太上天皇乃其号あり
法拂御道丸ゆいみまは道徳りあり
海慈王太子誕生の時御舅を相之経甚お似也

阿夷と云人を仙人おふく後丸

ゆへ 具言るれも傳也 古字を借る樂そはごへと後り
いみまじとくり相 梅りこの巻よりしとあり

やまといふを 日本の相人 なる伴直うま若天皇をお
しまれ 廉平一高明云と相とて皆大和お也

や海といふをわいむとをとおか申と林必院敷あり
けか—とて 課賦及弟と云課役とまあつと申也
ヲ入トヨム
御ありておのをを賦とよむる大和相おひんせはつとて

寄あ也

ひり親王 回京より一宮迄を京阪親王位お云はる
又位お位と云必親王意下あり

南代の所服をこゝ自余若回京と云々

くくくく 洋ヤクク女ヨラ 又選

かきく 母くこの言を約要也

いよくみりく 天下をたすくへ人々を博ハクガク学あつて

き也 人不ハスラ学不ハスラ道ヲとも云く 呼

きくくく 小 涯也 至学ヲ政ヲ必シが 教ガたま

きくく 音スクヨク曜ト呼 九曜の約度を見て人乃運ヲ

余と勅トれ也 河

智神又 弘に政おし時たこれと云く今日中治ニる也

源氏よ 嵯峨天皇弘仁二年男女す人て世人小源朝臣

の姓ニヤクと知ル也源氏乃神也醍醐れみと云明親王ハ元服ト呼

前小源氏の姓と知れ糸院を其例也皇女くくへん也

中も姓と知れん也

光帝の回老 光孝亨多 醍醐也 河

朱雀院れ約幸をま多御門よりはを御す也 呼

回老 右はなり

三だい しく久しと可む也

きさい 光帝乃后ま也

みのならん しくちらふ人と也

まのく 早速也 速

見うーあところ 河後ん事なり

はせうとの共す也 右つ平れ所兄弟堂上乃父堂見い也

此書より事多き也 花 業花物鏡才六中交敷子

所置几ハス上东门院乃月ハスせぬひハス杖ハスとハス叩ハスや

くねほハスと世人ハスヤハスれ 呼ハス来ハス

つとハスりハス包ハスまハスうハスく 童ハス形ハス也ハス

十二ハスよりハスく 礼記曰 天子之十二冠ハス冠ハス何

のハスりハスら 者起

有敷 芝ハス寝ハス敷ハス 師子ハス狗ハス犬ハス之ハス定ハス所ハス委ハス 乃ハス之ハス清ハス涼ハス敷ハス也

とハスりハスへハスまハス

所ハスく 饗ハス飯ハス あハスくハスあハスうハスぬハスんハスけハスせハス乃ハス也

くハスつハスりハスとハスこハスこハスくハスらハスうハスぬハスん 内ハス膳ハス寮ハス 穀ハス藏ハス院ハス

春之乃町を公俊のまゝに事もあると云なり

おハスまハスすハス没ハスてハスんハスとハスあハスらハスうハスりハスこハス也

りハスたハスてハスく 侘ハス子ハス也ハス今ハス衆ハス親ハス王ハス元ハス服ハス内ハス畫ハス沙ハス在ハス撤ハス大ハス床ハス子ハス二

膝ハス立ハス出ハス沙ハスありハス源ハス氏ハス元ハス服ハス乃ハス敷ハス上ハス所ハス侍ハス子ハスとハスうハスらハスあハスらハスく

也ハス今ハスもハス小ハス拍ハス拜ハス亦ハスとハスのハス町ハスハハス六ハス位ハス花ハス人ハス二ハス人ハス没ハス上ハスのハスあハスらハスり

とハスりハスまハスてハス是ハスとハスらハスりハス事ハスありハス 花 西ハス文ハス抄ハス 於ハス委ハス花

小ハスありハス 清ハス涼ハス敷ハス亦ハス廂ハス也ハス 清ハス涼ハス敷ハス又ハスケハスるハス也ハス 水ハス才ハス一ハス才ハス

母ハスをハスるハス所ハス法ハス法ハス所ハス帳ハス間ハス 師ハス子ハス二ハス狗ハス犬ハス二ハス帳ハス前ハス也ハス 南ハス才ハス三ハス

間ハス床ハス子ハス三ハス脚ハス才ハス四ハス間ハス奥ハス五ハス所ハス厨ハス子ハス二ハス脚ハス 多ハス玉ハス物ハス 才ハス又ハス間

四季ハス所ハス屏ハス也ハス 石ハス灰ハス壇ハス 弘ハス廂ハス板ハス九ハス枚ハス才ハス五ハス道ハス海ハス障ハス子ハス才ハス半

長ハス足ハス也ハス水ハス而ハス障ハス子ハス才ハス法ハス細ハス代ハス布ハス障ハス子ハス墨ハス絨ハス也ハス二ハス間ハス才ハス上ハス所ハス房

之ハス添ハス有ハス昆ハス的ハス池ハス障ハス子ハス才ハス法ハス涼ハス野ハス小ハス等ハス拍ハス南ハス切ハス妻ハス才ハス三ハス板ハス号ハス見

系振向上戸被立二年中引事障子

私 唱振釘不野人の足音とせん用也

くうんご 火をよむる一りぬてもるれとも火と書

そと糸あせしれゆへかり

ひえの連 もくろと引入也

大花の着人 花人乃大花と色しる人也

若き端裁為つ懸理髪をれとひりかり

かうかりー好ひて作やすし冠若の休所也

康保二年八月抄記下約束身つる故立屏風其中に敷

出浦二枚箇一枚并用中家の親王撞衣とおと

今奉一世源氏元服はもとゆとを以て休所とよめ文抄

みしらし 元

はうたしちつりのるて 元服の故装束わらそ乃町おり

とふへし 童所の町を赤衣は襦袢の袍と着す殿上童

しも赤衣也元服の故を源氏志をせ位人也

元服令衣之位を黄袍也西文抄中も黄衣とみしらし

元服の故を縫膝は黄袍と可申但延長縫殿寮式衣位

を浅黄也芝ふりりて成記云長和二年三月廿三日朝

冠衣玉衣黄衣浅黄也世称之黄衣也玉王子事也

権記にハ縫殿式の浅黄とみしらしの衣と倉尺して世称

黄衣ハ詞とゆ一ゆりまのきししゆり味を親王

の服袍を用ル町のり縫殿式浅黄よひ意あるにあら

よむ向も合文の黄衣と無^キお遠^キありきまじりたる縁の
又とまじりぬ権記のいひ也所詮は相壺^ツ清門と延嘉
よあすしへゆきはむ和以^キ糸の事也西之抄一世源氏
元服の所も黄衣とありきく黄袍乃^キ冠と可用之也
是^ハ淺^キ黄也

三人がみる 一々可^キ感^ル涙也

親王以下元服の時掛^ツ簪を清涼殿東庭より所^キ前よりむ

まて五刺之^キ所元服之^キ前殿也^キまは雲上より^キ所^キ前^キ

まびし 雅 日中記

の^キ前^キに^キ重^キ 理^キ髪^キあり^キて^キれ^キと^キる^キも^キあ^キる^キ」

ひまの連乃^キ大^キ長^キれ^キみ^キと^キり^キみ 大^キ長^キは^キ方^キを^キ相^キ涉^キ連^キ技

しる^キ事^キ又^キし^キ無^キ所^キ回^キ心^キま^キい^キた^キの^キ用^キ意^キと^キ也

み

ま^キい^キひ 殿上也 衣^キは^キも^キ没^キ上^キ人^キを^キも^キま^キい^キひ^キと^キ漢^キと

女^キ身^キ乃^キ侍^キを^キ臺^キ置^キか^キり^キる^キ」

み^キさ 酒^キ 日中記 三季 冬^キ他^キて 夏^キ熱^キか^キと^キる^キ

又^キ三^キ寸^キ酒^キれ^キ若^キ去^キ同^キ邪^キ三^キ寸^キす^キ又^キ寸^キ馬^キた^キり^キま^キる^キ

又^キま^キと^キよ^キむ^キと^キる^キ也

又^キ社^キ造^キ酒^キ杜^キ甫^キ男^キ地^キ也^キ若^キ日^キの^キ飯^キ園^キま^キこ^キま^キい^キあ^キる^キ

し^キる^キ毎^キあ^キり^キて^キ成^キ淋^キと^キる^キ

り

あ^キら^キけ^キま^キし^キ親^キ王^キの^キ徳^キと^キあ^キる^キも^キあ^キる^キよ

上より下りての事ありと申すは、あまのまゝに申す事あり
と也 此等の上事
れまへより 西宮抄に依りて、盛津之殿上よりありて引
入大長と云ふは、前へめられて、盛津と云ふは、
殿上よりありて、此等の内侍して、此等也

うへ乃令ぬ 内令婦即令ぬとあり 大妻は、
内令婦と云ふは、うへ乃令婦と云ふは、
下下の妻也 内令婦と云ふは、
白大長あり 大妻之長事也、
女房ありて、此等ありと

も大掛ありと云ふは、
大掛之事、小掛は、
まゐりて、
を只夜と同夜也、
以用之夜と申す、
装束とて、
是をたきみ、
所々のつきの、
以ときまふ事、
此門の所祿、
ひまひはらふ事、

も大掛ありと云ふは、
大掛は、
まゐりて、
を只夜と同夜也、
以用之夜と申す、
装束とて、
是をたきみ、
所々のつきの、
以ときまふ事、
此門の所祿、
ひまひはらふ事、
大長父し、
一

まじやりの申ひよ書とする物也書とせはまたと人た
れる

なりり 臣教より重役へのりふ廊也 大内の時をい

取らまきと掃きて来乃庭ふれゆく道ありて引入乃大内

かともい掃きとくくして御茶付辰巳のりくく御前

おひきて舞踏一はへし今の世ふも掃の房おやい

るるうまうてきるなり 矣

ひつころ たると案の馬也

くくわと取の 花人ふ禁中仙因執柄大内家ふもあり

殿上の次乃るふ布障子を隔て花人ふと云あるは下の

若れ作とれ取也 呼

わらひのもの わ横 献物也 ひつびうづとよびし

るる奉 取詮とものも取物也 献物のいもあり

どひ食 一はくくも取物也 七食はくみ飯と云物なり

下膳のらふ飯と心得し 七食を元服の人乃中家よ

り結陣の役若よ是をわのらけりのるる 掃奉横を親

ま以下の元服のんきと云くま京文の取元服乃町れ奉

也ゆて下乃討よ春文れ取元服にうとまきとてとまき

さほう 用意 又御流りり

め悉のまゆすく 源氏十二歳 孝上十六文也

あのとく 左大臣園白る心

甲の悉 花人乃小れくく成り人里

源氏物語にもみうん 花人と田舎とあり

松尾のちとくも 夢上也

おとろふ殿始て 十二歳より二巻より十六巻とある

ゆりこりたへし

又日 六日 二日 三日

あくら 巨き音 多し音

おふかく 窓也

お月一つはく 芳 又お月一はくはる

志づりさ 淋奈合

あはれみのき二条院也 業亮物語みゆくて大敷の十二
乃まのまもをばひり二条院といみくはくせはひ

てとやよりせよ面白とほひゆくのみきりつくりみ

りせぬへを 今案は奥院を二条系極よありりて

二条院と号せられたる二条院はきり可准よや 花

しる也源氏の治里の二条院はきり可准よや 花

修理職 家方や修理する役也 本之 修理 内近家持

いけの心 五二

いけの心 樓額 鷓鴣 池心 浴鳳凰 白氏文集

鷓鴣 樓之名也

朗誦ふして見出ス池の心を也又池のまん中と心

ぬる

草子 雨軒衣冠 出心 小蓋 ぬる ぬるともうきと

やまをいふ教む池の心うあゆみひもるま 弱恒

わりのやうなうん しくたくこ思格といへる

教壺との心なるを

源氏を引て日教りの格をるて禁中へ入給ふへまか
目教不定皇子打と汚乳文の前よりますことなり也
源氏ハ別後事

又源氏悉のえ服は縁給ふるをま又汚え服は時乃後
を表すなり

第本 相壺乃かひひと云家大徳也

第本 又月の事也

十二女より十六歳までけるは中へあもまり

坂上^{サカノ}是^{コノ}所^{トコロ}を 平^{ヒラ}貞^{サダ}文^{フミ}家^{イヘ}方^{カタ}合^{アヒ} うれゑや坊やう

わゆる第本のありとをみしてあはぬ悉也

第本似しう本れ毒乃^{ササノ}定^{サダ}爾^ニはあはれとてそのうをみして

下にゆけを^{ササノ}毒^{ササノ}乃^ニ定^{サダ}爾^ニはあはれとてそのうをみして

そのりや小せやを信流おあはぬ也

は巻を序^{シヨ}ふおはるるを 相壺ハも前也いをを序

分の心る^{シヨ}へしは巻ハ後浮橋^{シヨ}色の首^{シヨ}毛^{シヨ}一部^{シヨ}のあはれ

たまはるるもあはるるへ一切^{シヨ}あはれはあはれとみ

こをなつ理也 剛の意と可む也

人間を威者必妻命者定離也

ひつち源氏 花きの末れ詞をうきて書と

名乃とくとくくや 句とほりまむも切ともなる

名きことくくうて又りひきおれくともあり

中庸又きあ海無言を香

何とうもや名にふ向嫁と又きすのあつなひる

すまことやもと お書也

漢書 李廣傳げ字あり うろくぬひ也

青りくくくよむ 好又のひなるる

何小遠とつるも後も相遠れ 名とくとくく

へやもまきさうりあふとつり 儂も透人と云むなり

人乃物ゆひ 紫莖や とうとわくくく云くも也

海めたり 志立在中おとま好又のりくくなり

かふひうふ 藤 ウルハシキ やりくの殿也

かふびの 一種沙流 時 松耳よりの也

りくくぬぬ たゆ経のぬ也 一人お好又をたて下

実也 源氏とくく而也 実元は筆者抄端成へし

清女細之枕双紙中もあふれく 袖鏡くこのく小おとま

まこ中将 きより 双批判也 包玄乃志としいり

と云一祝あり 勿福南官中お也 名云故書たる菓子か

まはむくれるり 一儀ね包玄やまめれと云く只後よ

式王のけり同をまうく可也

さういふようして句 内をりよりとらふ也

志のふり 志日れく五世のまをりも志れふのみん

ふまひ志れき 誰れと云ひあも事り

めるれたれとを 考と源と云後 花江

うらまへりまけりまて 双也

ありぬ 是よりぬれ不定也 又日比る也

三日以上 日霖

内相いと 辺毗羅衛國中を掩林を下まて文鬼王号物忌

其鬼王色化鬼林不害大鬼邪王誓願利益六部を修實

我名号若為人宅相性屢現面者頻示可愛法因害之町條

そ日書我名立門をた他鬼邪不令其人書我名令持人ぬ

新守護 後軌

内者外者として外乃紙打とて内人不用若を物枝打也

子相忌と書て冠の標りさうれ又たれ内神は白紙不

書て付らぬ浄殿内益打やよも回一又悪業よあて冠

益中も付付さうとひり 悪業の一名しなり業と云

名取也 板撰 のまこととまらと立け一我名よあしなり

まらうひやならん 業之

くくの白みりまも業也打りま也 河

ひのぬ 名取

ゆきそひ 業取打とひり

なにかん 何れのものともいふ也

文はく 相壺の姉妹イモトノ三文乃の版の及中一也

たのれとくれりてつるも 田舎也

た大臣汝へのうひ計やう 水源氏志なり

あの悉も みの字よと妻よよひひのぬむ可也

志のらひ 形理と書 括仙

れとくく 願丸 漸ヤラカ此字乃心丸妻を源定の心なりへし

伊勢掬終の長乃字乃心り 無正拵心也

右今ののれとくくをわりのまのくまのまよと云ひなり

た徳目 治ツカト云 治ツカ理世ツカ子也

願 源定の字れひと也 意きりていふ版丸

りこまりもきりてつるも云ふもあり

あつものうちり 相壺乃まへまゆりなり

敷上の中れとくく人 あつを定する人されと心たて可

孫丸 又願心の

との井雨を 相壺也

おふとのあつちりてそ 切キリ折トウ壺タイひるをり一也の

そまのく又あつとまのまり 比文を 文也也

久くは 好文也也

をれのちく 吾 自ミヨク怨ミヨク 心ミヨクの心さ一乃まくなる

とくく 各競るも如何

もんすれも 句 怨 せんこう 双也也

あしとせちよ あしとせちよ シツカ 双地まじり シツカ ねまほ

とびくかり

大さう 大熱 外振ひまじり シツカ

二升町 次と云心 片二階とて文書又を道や打と入

てとくものまじり

うくまほく 中おのみりめと 双地也

うこふ 足下也 先うり同量なり

内鏡一あり 及中し討也

女乃乞そ一とせちよ シツカ ありとて シツカ 一しり

まやまめ字成る

けりよりま 子筆也 シツカ 子にのなり

うもそ うれ色なり

海ふりれ シツカ 実あり事なり

月の心得 方なり シツカ 子筆也 シツカ して シツカ なる シツカ と シツカ なる シツカ と

ねりひて物三たてなり

おやかと 二親あり シツカ ひとめ シツカ 代事也 一候

あのみく 崇

おひされ 大小 シツカ

揚家 シツカ 安初 シツカ 成養 シツカ 在 シツカ 深園 シツカ 人 シツカ 未識 シツカ

お母とれ 史振る シツカ 心也 今秘

とりのま 琴箏 シツカ かの シツカ の シツカ ひり

ゆへつあて 由 シツカ 一 シツカ 藝 シツカ は シツカ と シツカ なる シツカ

とくんと 中立せしとなり

ゆてありぬ人し 出たる所をいへりていへり

くしとん ありありとていへりていへり

うめれとて 歎たれ所也 歎中れとていへり

成源はらんとて乃成の中なり

そのおのりて 源の詞 二條 末摘南苑

一藝もさふ人きありとていへり

いへりあり 乃中三條

とていへり 乃成の中なり

とていへり 乃成の中なり 乃成の中なり

と也 時

上智下愚不後 子曰唯上智与下愚不移 聖人 温不縮

聖人よとていへり 下愚を又聖人よとていへり

不後とていへり 中乃ありていへり

みこととていへり 再びもふとていへり

それありていへり 源種也 田原

ゆていへり 源種也 一様

くしとん 今撰叙令 位子と書クライニミカトヨム

又かとのりんざらめ 又一様

聖人 法大まおとの後立位に成るるなり

揚家を生けりていへり 乃成とていへり

ひ乃ありていへり 乃成とていへり

左の馬れりし 誰ともし

友或る 敵家の人なり也

拙くつひとをれ 云々 ことと云ひ也

中おもしろくして 句 かくれあつうひ乃批判と云ふ

ゆつり経也 史に記した人のうへに記し也

双地る所へし

るる乃かれとも 乃乃批判 源氏の経よき也 比修

惟乏の女 教内伝成へし 是より十八回巻あり

とやをぬんしとなく 末摘類也 教内を中京成へし

あゝろそひとてても不ぬさ乃とむるへし 佛教も

世を相る中る也 ことと云て人の句國のこも

かくれあつうひとをれ 句 かくれあつうひとをれ

世しうを 姓乃字 あや かくらるる心なり

あやくの かくらるる心也 なるの心なり

初てひつり 成るる家なりへし

世素儀 天下の政をまうしと云ふなり也

世素儀とを 大政官の政務にあつうぬ人をいつり

二三位又云ひれ 世素儀と云ふなり也

もとの根り 根中乃姓也

かむらのむり也 名清也

家だうらふ 明上やりの根り ことと云ふなり

ことと云ふなり

あつうひとをれ 花極人なりそのあつうひとをれとせむ
又ことと云ふなり ことと云ふなり
事と云ふ花極人のことと云ふなり ことと云ふなり
よたことと云ふなり
ゆはてんて 花見は信氏の返事にあつうひとをれと云ふなり
ことと云ふなり

まのりをうり 桐文也

もふりとも 不省略也 不效埒也 河

すんでふきくくくくく 才二後 源経也 昌饒 饒言

こと人乃 中にお経 源よ本似合とるる

中お経るれも 惟の言中

りく乃ぬ 馬討 女三文 河よ流悪也 才三後

うらあひもくれくくく 菴壺るゆるくくくと思ひなり

かたりのり 馬の流かよハよくく及とるる

世よまると 夕良上也

れみるる 葉より相遠くくく心なり

りく乃年なり 菴武アの妹也 才二後

りてや 源心中突上たなり志りこの勝たる事るまぬ也

ちんれぬそくも 沸うくはえまぬをり人

但衣替の惣名よいんる所もあかへし

かよりくたりる子 拾費ハ必めされしかどりのりも称

と略也 道遙流敷流流

ちとけなり 涉頸脇ふむむうの首れ扱よぬとるる

て人あつまひとやえ也

女まゝく 二後あり 女よ成てとるやかり

大うく乃せに 馬経 才又修外要後也

うらも物 黒也 黒鳥とくも世中一と一人くくを不

穢也 れと先くこのりへし

うしきとも子 天下政ハ大政治家よりして其の百様の所
さびらみよりして三ひ九那と並り 上念海徳の其
下念懐忠信の本事より ゆるろひあてするなり
上下もくくこあつてもトをわさするし

きこし家 適 毛符 天下を徳人力とあもする回中

く易也 國とおさめんとおさる家とおらあてり
と治めりとなり 何

とあまきあつてそくよそとすれりしとあつてすれ
とあはのひちしきあつてさるらよ うへもつらうど
と云ひ也 後撰よ りらるるみらしきやきよふた
と云ひ之るるり 往き後すらや じやうとするる

あつてせうとをれもその中れ所

りのめみ 斜字乃心也 大方を子ゆへりし
事あつても扱れりみんくれりぬと

い詞女なりめ用心也 男の心をとり

あれと 句 心をなまひ 心みりれんぬいもさう
とく不及してむらとゆりしきともさるる世感るりわま

に撰とそゆけをなり 兩せくの詞入るるなり

のちちきさげなく 支取可證也

をれりきく 小輩かともさるりもつりまよれを扱とあ
とさるいみむらりめてやも不入也

文のつくと 六条の息前心をさるる念たり

お母とら 大やうに書てなり

しつとて 言撰

又さやうふ 終て書らるるおやうふ對面をせらぬと思へ

えまこせなとて物を思ひせ 又またハを文の事也

いはつて書きぬりのたす也 心を付る

おまゝく 所をの声支付とよまゝをてなり

乞未^レ拙れ女なりへし 税に不用

かや 女乃をうならとおもつてもやをよりなやとて心

みれんあこくしをえゆる人あう乞才一の款也 時

しこのかのに 妹なる中よりなり

まれめるおまゝさ おまゝなりけぬんとつて可成か

のあつち成へし

物乃あつち成へし 一りものことなる一なり

れりしきなりなるとおもわぬるとも 棄てしはけり

るおも又いおし成なり

まゝめら 好まおすくじ心也 ちくちくると云矣が左之

みまをさみりら ひんのつとて再よつまつら

ひらうまゝ 貪^{ヒンサウ}相^{ヒンサウ}にたけやえ心也 此意はひんらう

お也 係^{タウサ}係^サ 心さうとてなよと云心也 多くさう

もなひとぬえ也 けけゆひらひつとて何れよりそ

まゝあやあしつとてしん

よゝあしき 事なとなつてりや 縁合とて心成へし

さしくこ ありけしきや八重よあり涙くじむなり

大やありくどくちく 云方事一にわの腹乃を也

あうくも 後めりきうのせしりと独カクラヒ 独カクコトの沖を

取へし

あもつうふ あもくくーや向いて男どりよさそり

おたる沖るさ

ひさあろよ ひめたとなり

こめよ 巨字 大振じりひ也 雲上よはを 呼

巨細とま大かと云む成るー

ひさほくろひ 暑イサヒんぞしてなり

けふさーびつひ りとれーさ方につとくと思ふんと也

吉ツミ辛 聚分韻 毒コハヒ也

まけおきて 振立てのぬれるなりーし

志いてし月あそま也 次大乃君はもめりの湯くそひ

おや雲より代電ーなり

わのひと 雲分あさくーくーんとさる

たのりーあうたーくや 以本とくやてよーかひ得早

所んと書てとりの云説を之

作はききさーうそくーき ところのう海なるるー

貴お雲の類也

あしめーゆ ぶくばくーゆ

今やーくあーもまーくー 人さーいひむおんあーいすー

—おを秋もつゝぬと云ひ也

唯識論 ブツシキロン 三身唯心乃此唯識乃心也一乃於心成也

縁ちけりたし 倭人 ヤマトノヒト けきこのまきき人也

うゝおもてあふと心にて可成れ

ゆほりやうふ 愛止れれ也

阿まらりゆへり ぬと由也 ぬハ陸性なりとよ由

とさうとある事なるゆゑ — いくせは別の事なり

ゆとめ とのを求りてしと也情を連とにつちんと也

らん子物さうして 夕顔上のれなり

怒 イデ うらうらうやうきむなり

うゝとつゝと事ども ぬつたうひきよううゝぬ也

論理 カクシヨウ 論理の友 トモ 友立明 トモ 友立 トモ

うゝをつれなく じ イ 探 サツ ちきうかならむ心さる

若根もあうきさう入らうつれおられ下ハえなうをれ

もむいと あられおのみまかおもゆる愛つれとた

てつ ツ せ セ せい セイ せとたのよ

海つゝおとあ 我と志教波のうゝとあしとああめと

うの乃あまと盛まの 女今詞事 メノイマノコト の ノ 女 メノ 女 メノ

成て男を振てけつと手あとなり

わらうとあし 馬乃あつと — 可 カ 可 カ

心妙なり 伊勢物語ををり 念 ネン 念 ネン

ことあつひ 好更の傳おつと指と也

今思へたまひみられぬへまゝなりぬとなり

忍る目のまへお 自然つゝまゝなりありまゝなり

果とちゝすゝてのむ也 以後伊勢物語の叶あり

りてわなひなり 女乃女を辨てりゆ種也

ひゝすゝま 太きゝゝ又ひをれあすなり

山住おとの女れ辨と男よゝゝゆ成きて男後れとま也

双たるゆへし ありけりま討らゝゝゝし

夫乃ぬひの 後輩なり人のゝゝゝゝ候とゆゝゝゝ

みて道世れ女のゝゝへびてま様ゆゝゝなり

礼記云 后之言後也主之奴也コトダキ女謂奴也

ひゝゝゝゝ くれ尼とて若もぬ喝食ゆゝゝゝなり

うらひうみぬ ぬゆ方 又眉とてゝむゝゝゝなり

流射のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まおとむとあゝゝゝゝ 流流ゝゝゝゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ 若執ありゆゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ 自然ひゝゝゝゝゝゝゝゝ

又るれめお 女とちゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

をひみんとて恨事のいひと也 又夢やたのむいふの男
せうりうりやとせうりうりといふもさういふいふいふいふ
うたゝとせうりやとこき世俗のまゝいふ女の堪忍(カニシ)の
らゝとせうり

とらうりまゝのまゝいふも さうり男のむらとらうり
式説(カニシ)やまゝ女のむらとらうりもさうり男のむらとらうり
とせうりまゝ 昔(カニシ)といふ今(カニシ)も せうりたらうり
おまゝとせうりいひるはるゝ
すくゝとらうりのいふ 上(カニシ)の様(カニシ)といふ
意上の類(カニシ)たりし せうりてやせうりたり
いふとせうりまゝ 物(カニシ)とせうり 堪忍(カニシ)といふ記(カニシ)不(カニシ)せうり

おまゝと せうりといふは堪忍(カニシ)といふ書(カニシ)か
せうりといふ 多(カニシ)とせうり 馬(カニシ)に中(カニシ)るは
おまゝのいふいふおまゝもれとせうりといふ
おまゝのいふいふおまゝのいふいふいふいふいふいふ
男(カニシ)のいふいふおまゝのいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

中(カニシ)おまゝいふ 舟(カニシ)のいふ 舟(カニシ)のいふ 舟(カニシ)のいふ

法説一周論ホウセツ一イ周縁説イ一イ周亮委イ 女のしとひ

と云ふるは法説也 本道行をいたし人なり 以後之

周縁説 本括 ゆひらひおとの相経可成む面白ト

アハハハハ 條内 定らざる寸尺を他事たるナリ

うも法交 側付 そもこのゆりたるひるま

あれをこ 又今先くきに目うけつそ他中道大札なり

うらりき 美藤 綱夜

又その 西ま抄云 五武具内東勝法書初南まの面又

位亮人臥

すまのま 墨繪乃事也 金忌子公整 深江 廣高

田代め也 金忌ハ 豊山十又ま 廣さそ又ま墨徳

あてみきち墨よして差別見ゆる也

けましくを 次舟くとりり 身内を不見けるる也

ほうらうれ山 人の不三事一を何と書ても不善死魚歎

ふとましくゆる相なり

韓旭子 抄名也 張衡傳子云 容易斎王書若回之封

日狗馬尾抜鬼魅を易狗馬人なり也且善お前不類之有

鬼舌孔若可取易

まくよめなりぬ 健つよろぬひなり

心ちひひ 心所のひるま

てまのまらるる也 お坂此園乃定りし市なる一山立

つひれきりりれあす 是坂の園の清水は乳也

てのちやひくらんりち月の物 いかれ異別のし
唐大家町 柳子権 筆録 心正知筆のちく 心正
知不正筆の堂殿之時の成書唐法さびく時唐人讃目
自中友大后ハ王義秀之再奉りて云
市よりして人の目より物をしてお尼の讃とて後
とて也 実方とい福乃町心とてしと町の用み立て
堪也を実方を笏として成冠を打おとすけしとてうさ
控みてすの建とて奥州とてむなり成り人里
もつるまるす 三の道の成ともむりら大事なり
忍るめれ 情けりりをもて歎れとる也
とらけりめりり かつひりら事をとらり

つらつら キレハシ 白民文集

流の師乃 流花三周鏡前也
源氏を世派政しし人へを世上の善悪とてせし
まろく人またあるか ありけりまて双地也
源氏の時代をたりとて也 若きかつとてまて結核ま
とある人乃まへとてまじとてたれ物種をも用むる
也 定家の志れまよまんといれはるもますり 胸
中とおす人 一とて 一とてありとるん
とやういふ下らうか 牙九條
右分詞書にまもやとて後 一とてとていひなり
まよふとてせけり ひらうとて家とて 一とて物種のを

今うしろのいぢぢ

海がそよよびし せせの沖心也 おりよとよも也

そるれ本のみちれくしてひまきれちかあひすくすは

ひみでーのれ

無心神やものひみちりちとあじきまのーせなり

よれへとき まうははうり也

おろのなまー わんばよひれ

又海ーもま也 祢院教おたののひよ用あ入り

あつとせなぬぬ のつとけくのきをなれちあ乃あう

あつとすあぬあとのおきん 拾遺

あつとさう ありあうなるー 祢のむれとくお好まひ

よも馬打さめいりるま

らの人とを 男のためいふじ也 馬我事とま

すくあつ あつと男のまのうの事ーとーいりるまじれ

何由中うのすくあつとまのひるれあうなり

とあつとよまひとを 男うー女乃なひくま

うやさん かん 不^レ便^ハ應^ハ矣 白良

れとせあせ 而^{オモ}必^テ而^{オモ}必^テ云

みまお 為^レ何^レ可^レ能^レく者^レらなり

さぬあふ 離^ハ別^ハちんと思^ハく相^ハいんーとせいの也

うしろのへ 人乃討^ハりけくまを

我^ハ入^リさうりうりるま

あつてく 馬のあつて 退か之刻なりとあり

家ちと ねももん 室家也

きくまをあらう 又たのこころあり

そころさむく 為の毛のいなる

人目ろく 人目とろまむ也

れくをれく ころりーきあしあなり

火ののりふ 映^{カク}と油^{アビ}燈^{アビ}燭^{アビ} 白^{カク}又^{アビ}柔 映^{カク}之^{アビ}照^{アビ}也

あつこへ 飯^{カク}油^{アビ}なやふれくし

お母ひなりこ ぬせ終なり

ひるあくへみ 木^{カク}丁^{アビ}ろせんここむるる

ころひけりやや 馬とあつ折とごよ也

あうとしこまなり 飯^{カク}の^{アビ}ハ^{アビ}なり 正^{カク}力^{アビ} 河

飯^{カク}来^{アビ}ろを今もひ負と云

おやの家一 おやれ所へころひけりるといふ人今教こ

たごへうあると約折也 けい^{カク}ころのこむと不可折

今教ぬるれ又何となくとも死

もんまゆ 女^{カク}あなともよまらうなり

ひこやこもり 直^{カク}流^{アビ} 垂^{カク}流^{アビ}也

歎^{カク}心^{アビ}ぬま海^{カク}成^{アビ}へし意^{カク}志^{アビ}なりとすてあまことれ心也

まらへる物 男^{カク}れ^{アビ}衣^{カク}装^{アビ}也

まれみとらん 女^{カク}の^{アビ}男^{カク}を^{アビ}みとらん後^{カク}なり

ろむきとせまき ち^{カク}ね^{アビ}ハ^{アビ}ぬ^{カク}り^{アビ}ぬ^{カク}れ^{アビ}る^{アビ}り^{アビ}と

又女の男うゝあらしんと悪もさすなり

あゝをうゝ悔をゆきと 回心也

うゝをうゝ 男れ心あゝなりとせむ女まゐる

ころさん 懲 毛結 ころさんよむ 回心也

うゝくひなひきて 引をきもくもくふんようて春物のつ

まひあすううまいたのときく

たそふれ ありぬやと心みのてうあひと結へたそふき

ふく記ましようきき

ひとへうゝ なく成らうと結たれとなり

左田嶋 深むま事一上よりあゝや 心うゝとふれ

中目成の左田嶋を繋うむとや山のてらる年 後撰

七夕 ぬきくれじ也

漢董永少失母養父家貧傭力至農月以テ小車推テ父至田臥

陰樹下而嘗農作父死就主人賃後一テ万テ納賣力為奴遂得

錢葬父還於路忽遇婦人姿容端美求為永妻永与俱詣主

人念永事織纈三百匹放汝夫妻乃織一月而畢 主人壯

其速遂放之相随心旧ニおヒ遇フ處ニ辞テ永曰我天ノ之織女也云

急ニ至テ孝ニ天帝ノ命ニ助テ免ス償言託テ凌空而去

うらさく うれりーさむ也云おヒうヒさヒいと云まヒさヒり

まり 伊梅相種ノやふもうたさノと云すノうノこノまヒ成

るー一ノあノうノさヒをノりノ人ノと

七夕のちゆふ 舟十後 逢事ノそノ七夕ノめノふノと

一まはらぬふりさきあへすまきけり
まはらぬふりさきあへすまきけり
あゆまき ありうらや 金張業連袂

何うし何ゆふとあゆこりふらん 日ひなるる
を舟よとらり入ー物ぞおぼつくれ

その結団場 まてきまあひのそ比類ヒナヒするふとけり

もうなき 自然流るるあへりて善悪ありいめの
志まそのよふ事かじりうー對しての詞也

は詞とふ面白し

あつともへ 業也

あつともへ 業也 東十一段 馬籠

打うと 新なり

けー望のまき 名法也

尺のめもことまなく ぐめこの詞也 無事乃心成へし

これさのあゆ 揃ユビくひし女まき

あしなく 屢 本うらまの女也

まきのまきは ありけぬ心也 いやる心ひかり

大畑を 誰ともさしー 所縁をるー

こらひ人あつらん は敷上人かきー興げのうや

まぬ 過 ふうともあがり 春風あきのうらま

てあけひけいーやうろふとみん 吹風よあつら

へけくる酒けいーをいー中まよまうしつてまー

すまじぬけ也 又よきんふきさこちへいふんいふん
いづりひりもあへし

あつけ ぢりーろーろぬ詞となり

能言を地乃水句 孰と何うもそりともん

ぢりーぢりー 波上人れまこらなり

ましろまそ うりぢくひ也

席のまろこ 板敷のりなり

のきもりー 詠物りー あそり井み屋とりそすへし

うけもりー みまひもさむー みまくあもりー

のちもりー 木陰 みもひを寒水 一説めと如井

を系よああ後也 二系方ゴ小波コハあり 元

けし志望 けし望うふ也 噫 漢書又選とる大誤也

噫を 噫と也 只けりるあるー

わあん 和琴 能唱調あり

伊勢語 伊勢イセ無ナ時トキ念ネン池イケ出デ入ニ 弓六張りて

考用らるとも後ノ池イケなり

まらのーへ 秋を律女を律りーくれなり

元子律也

のりけりー 和聖るれを今也なり

庭乃繁ハりー ち今 秋をまぬぬ衆も者ふり志まぬ

道中ミチナカ分てとふ人のあし

終ハます ねこみひ也 池のあり建タたねタのりノもモ始ハり

ひびくへし いくもも人の通ぬればくへてあり

かみ結たすすむ心と 称名院殿御祝

あとの言ふ事 月もたけぬやうにならぬ言はうし別

け男とくもひえとめぬを結たすその首を也いさうそ

かろし結し海すむひけり

日ろのめり 言果下也

ひびくへし 言果下也

あさ連 ぬれしもの心也 されけり結也

まろし〜に言 本掛り吹あをする笛乃言さうまね

おどろくことけまハ何やして引とくめんそとけり

あう乃こと 十三弦 まへハ和歌なること

